

『わが青春の記録』と出会って

山本捷馬

『わが青春の記録』は多くの点で、思い入れのある刊行物となりました。出版までの歩みと自分の心緒を振り返ってみたいと思います。

今回の話もちあがったのは、昨年の暮れ、研究会のために国際日本文化研究センターに初めて行った日でした。休憩中に広島大学川口隆行先生がこっそり持つてこられた資料は、見たことないような不思議な本で、絵と文章が融合した作品でした。「おこりじぞう」の挿絵画家が若い日にしたためたという記録は、独特なオーラを放っていました。ぼんやりと驚きの声をあげると同時に、企画はこのように降ってくるのだなと思つたことを覚えております。そうしてこの、シベリア抑留後に一人の若者が記した半生記をひもどくことになりました。

『わが青春の記録』に関心をもつて取り組めた一番大きな理由は、作者四國五郎が、二五歳前後にこの記録を残したからです。

私も丁度二六歳になりました。生まれた時代が七〇年違いますが、自分と同じだけの年月を過ごした一人の若者が、その半生を綴つたということだけで、自ずと興味が芽生えました。頁を進めていくうちに、同じ年齢ながら、その只ならぬ記憶力と描写力と集中力に、すぐに畏敬の念を抱きました。カメラのように情景を記憶し、ほとんど間違ふことなく一筆で文章を書き下しえる力、そして何より、過酷な戦争を生き延び、命がけて抑留中のメモを持ち帰る胆力と決意を持った同じ年の人物をもつと知つてみたいと思ひました。もう一点、本書は、四國五郎が自分のためだけにしたためた作品だということが、刊行への強い思いを後押ししていたように思います。どこかに発表するためでもなく、誰かの求めに応じて描いたわけでもなく、ただ自身の今後の人生においてレジスタンスの姿勢を貫くという決意を自分の心に深く刻み込むために残した作品だったと感じています。満州で死線をくぐつた後、シベリアでの抑留生活を通じて四國五郎はコミュニケーションに触れ、まさしくそれまでの軍国主義

の世界観が一変したように「民主運動」にのめりこみます。軍隊秩序への怒りと嫌悪が、平等な社会を築くソ連の人々の姿への憧れが、彼を運動へと導いたのだと思います。そうして四國は、「民主日本」の建設を胸に、四年ぶりに祖国の地を踏みます。舞鶴に降り立つても、胸に浮かぶのは帰国の喜びではなく、植民地と化した日本へのもどかしさと、旧体制への怒りでした。複雑な思いが消えないまま、列車はふるさとへと近づいていきます。シベリアでも新型爆弾について報道には接していたものの、そこで目にしたものは想像を絶した光景でした。引揚者のためのバスから見えた、すべてバラツクと化した広島島の街、そのうえをさまよう数十万の霊の怨恨。最愛の弟と故郷を奪った原子爆弾と、崩壊へと導いた国家への闘争を心に誓った四國は、その決意を『わが青春の記録』に刻みました。敗戦後の日本の方向を変えなければいけないという焦りと、戦争への激しい怒りと抵抗への思いが、この記録を生んだのは間違いなく、その意味で非常に純粋な気持ちで書き記したと思います。（あまりの純粋さについては、四國五郎自身も、「若気の至りだった」と回想を残しています。）出版という仕事をしていても、これほど思いのこめられた作品を刊行できる機会というのは滅多にないと思います。自分にとって初めての出版の仕事が、このような作品だったということは非常に幸運だったと、お世話になった川口先生と光さん（四國五郎のご長男）、そして初仕事ということで大目に見てくれた三人社のメンバーに感謝している次第でございます。

以下、もう一つ、刊行準備の中で考え、悩んだ点を書き加えておきます。この記録を初めて読む多くの人が、作者のシベリア抑留

中のソ連に対する憧憬と、スターリン礼賛の様子に驚き、戸惑うかと思えます。私自身も一番強く印象に残った点でもありませんし、光さんが公刊するのに戸惑いを覚えた点でもあると思います。この点をソ連の洗脳だと攻撃する声も十分可能性として考えられます。それでもこの本を世に出し、多くの方に読んでいただく意義を自身で見出したいと考えていた時期がありました。（もちろんシベリア抑留の内部記録として一級資料であることは刊行の大きな理由です。）結局その悩みを解消したのは、一九四九年の四國五郎になったつもりで考えるしかないとわかった時でした。軍国教育のなかで育った十代、爆弾を胸に抱え戦車に飛び込む「肉攻」経験、敗戦とそれに次ぐ、想像を絶する抑留体験。栄養失調と過労により生死の境をさまよった後に、目に映ったソ連の人々の進歩的な姿。軍隊秩序を解体する民主運動とそれに貢献する自分の芸術、仲間との連帯、帰国後の焦燥感と虚脱した日本の姿、そして弟と故郷を奪った原爆への怒り……。そのような状況下で、ソ連が理想郷として映ったのは、ある種自然な流れだったでしょう。ソ連解体後に生まれた私にとつてはあまりに遠い時代に感じます。当時の多くの若者が、平等で美しい社会を夢見てソ連にアこがれたということは、悲しいかな、なんとなく想像するしかないのが実感です。ただ一方で、希望と覚悟をもって敗戦の状況に立ち向かった多くの若者たちのことを考えるうえで、これほど力のもつた記録は他に無いと思います。「炎の時代」と言われた占領期広島熱が直に伝わるかのような迫力と思いを、その若々しい絵と手描きの文字から感じて頂きたいと思っております。

恥ずかしながら不勉強で、敗戦後の時代について多く語ることは

難しいです。ただ、三人社の仕事を始めて、そして今回の仕事を通じて、あらためて歴史を考える大事さを感じました。歴史の授業でも扱わないため、私と同世代の人たちにとって、四〇年代、五〇年代というものが非常にとらえがなくなっている気がしております。現在の私たちが当時の空気を想像することは本当に難しいです。新中国が誕生し、朝鮮戦争の足音が聞こえる時代。本書の仕事を通じて、この大きなうねりをあらためて考えさせられました。

『わが青春の記録』が、多くの方、特に若い世代に、戦後日本の歩みを考えるひとつのきっかけとなることを願って、この文章を終わらせて頂きます。(三人社としては珍しく、ひとつの完結した読み物として手に取って頂きやすいかと思えます。是非ご購入を、そして、ネット上でも結構ですので、皆様からのご感想をお待ちしております！)